



岡本かの子全集

別卷二

冬樹社

TARO

岡本かの子全集 別巻二

昭和五三年三月一八日初版第一刷發行

編者 熊坂敦子

發行者 高橋直良

發行所 冬樹社

東京都千代田區神田神保町二一八

電話東京二六四一〇三四六

振替東京八一七七五七

印刷所 株式會社太洋社

製本所 有限會社三和製本所

製函所 株式會社光陽紙器製作所

本文用紙抄造 王子製紙春日井工場

表紙用クロス ダイニツク株式會社

裝畫 岡本太郎

裝幀 栃折久美子

別卷二 目次

I

岡本かの子序説……………川端康成 七

川の妖精……………龜井勝一郎 九

日本文學の復活……………林房雄 三

岡本かの子論……………十返一 五

岡本かの子……………石川淳 四

岡本かの子……………伊藤整 四

*

文藝時評……………小林秀雄 七

岡本かの子「母子敘情」……………伊藤整 三

女性の虚榮心……………	谷川徹三	六
「やがて五月に」について……………	龜井勝一郎	六
文學の嘘について 岡本かの子氏の二作……………	川端康成	六
岡本かの子「老妓抄」……………	河上徹太郎	六
岡本かの子の文學……………	山本健吉	六
本冊中の小説に就て……………	岡本一平	六
『鮎』―解説風に……………	岡本一平	六
岡本かの子『女体開頭』……………	武田泰淳	六

*

岡本かの子の歌……………	五島美代子	二
華やぐいのち……………	古屋照子	二
岡本かの子論……………	小林英夫	三

Ⅱ

芸術餓鬼 岡本かの子伝……………	岩崎吳夫	一
------------------	------	---

かの子癡乱……………瀬戸内晴美 二五

父母の生涯……………岡本太郎 二四

かの子文学の鍵……………岡本太郎 二四

母の業……………岡本太郎 二五

*

母なるかの子……………有吉佐和子・岡本太郎 二六

解題……………三九

(付)

岡本かの子年譜……………二九

岡本かの子参考文献目録……………三七

岡本かの子全集

別卷二

研究篇 2

岡本かの子序説

川端康成

1 「生命の娘」

……かの女の帯びてゐる何としても癒し難いと思はれる、憂愁寂寞の感じであつた。それは永代、武蔵、相模に蟠居しつゝ、腐るほどエネルギーを積らせながら、何の表現も途も見出し得ないで蠢めいてゐる、土着の豪族の家靈の喘ぎに似たやうなものである。かの女の後年の作で「家靈」といふ短篇には、都會の材料で洒脱にこのものを暗示してゐるやうに見える。幽かではあるが、その歎きは底知れない。

……かの女は玉を懷にして再び藝術に戻つた。ここまでのかの女を翻弄して來た生命は今や彼女の丸い手で翻弄され始めた。かの女は生命を魔術的多彩で表現し始めた。人間さへ捌けて圓轉流露の趣を備へて來た。しつかりしてふくよかな胸に大母性の面影が覗きかけた。少し疲勞れたとて

一眠りに入つた。起きてまだ居残つてゐる老畫學生は、かの女の作品「老妓抄」の中の歌を思ひつゝ、かの女が目覺めるのを待つてゐる。それはいはずとも知れる僕である。

年々にわが悲しみは深くして

いよよ華やぐいのちなりけり

(岡本一平氏「生命の娘かの子」より)

……かの女はずゐるぶんよく成長した女だ。櫻散る水晶山を夢みて、細く鋭く自分の性情の淨潔を護るをいのちとしてゐた時代から、慈しみの廣い大母性と富濶豐麗ないのちを瀟洒に披瀝した「老妓抄」を書くまでに成長した。内外の生活にも應所よろしきを得て凝滯が無くなつてゐた。何か母性的の格のある女流文豪に進展する氣配が見えた。

……かの女は生涯、重心に伴つて何をもつても癒し難き人生の憂愁寂寞といふものを湛へてゐた。それに絞められるとき、かの女自身如何ともし難く、もちろん僕にはどうにもならない。ただそのときかの女の骨身の痛さを我身の

やうに察して、「可哀相なカチ坊ちゃん（かの女の家中の呼名）だなあ。」といつて思はず眼に涙を泛べると、かの女は見て、「パパも泣いて呉れるかい、ぢや、もういいや。」と自分の涙を拭いてあつさり切上げた。かの女の老大な書きものの量は、みな一々この癒し難き憂苦寂寞を癒し切れぬまでも明るみとめようと試みた必死の努力の繰返しが自然と溜つたもので、これに對して解決とか理窟とかいふ利巧なものとは到底寄り付けぬだらう。ただその痛さと努力を察して涙をもつて酬いてやるとき「ぢや、もういいや」といつて作品は訴への鋒を収めるであらう。

……生れつき近代や人生の矢を負ふて自分の傷口を管めながら、赤子のまま膨らんで大きくなつたやうな女だ。女とはいへないかも知れない。そしてその赤子の泣聲には稀有の人生の哀音があつた。（岡本一平氏「妻を懷ふ」より）

2 私のはしがき

「曾て、このやうな苦惱が私にあつたらうか——心は表現を許さない嚴肅な苦惱を口含みつつ、酷しく私の上に君臨してゐる。私は奴隷のやうにすすり泣きつつ、こまごまそこらを取りかたづけ——取りかたづけることは小説を書

くことであつた。」

と、岡本かの子さん自身も、「ある日の、日記より」抜き書きして、作品集「巴里祭」の「序に代へて」ゐる。これは岡本さんの作品の方々に思つてゐる言葉であり、また私は岡本さんの口からしばしば聞いた。

生命の瀾漫たる噴泉のやうな、岡本さんの作品を読みながら、私は言ひ知れぬ歎びと悲しみとに、心を奪はれる。あこがれとなげきとに、魂を誘はれる。そのいづれもが、決して感傷にとどまるところのものではない。私は岡本さんの遺作に没入することによつて、岡本さんの死を悲嘆することをおぼれるのである。みづみづしい生命の河に浮び出るのである。縹渺とし、飄蕩とし、駘蕩として、岡本さんの作品を解説し、論評する氣持など大方失つてしまふのである。しかし、決して甘美にとどまるものではない。岡本さんのたいていの小説のクライマックスには、突然天がひらけたやうな電光がはためいてゐる。それは凄麗な戦慄であり、崇高な啓示である。また、岡本さんの作中のたいていの人物は、幼い時に、神秘的智慧の閃めきを見せてゐる。岡本さんはこれらを病的な超現實とは、夢にも思はなかつた。花が咲き、鳥が飛び、岩があり、月が出るのと同じやうに、健康な眞實と見た。精神の高まりと信じた。そしてそれを、宇宙の生命に參ずる扉とした。平凡なことわりだが、ただ岡本さんはみごとに具現したのである。岡本さん

の死後、かたみに私がもらつて來た色紙の一首は、

梅の木に梅の花咲くことわりを

まことに知るはたはやすからず

といふ歌であつた。

しかしまた、岡本さんほど、官能の匂ひにむせぶやうに、肉體を描いた作家は、日本文學の古今に、殆ど類を絶する。谷崎潤一郎氏の女體嗜好に魂を入れ、眞の女人崇拜にまで高めたのは、岡本かの子さんであらうか。なんと言つても、岡本さんが最も打ち込んで描き出したのは、美女の像である。長篇や中篇では、「丸の内草話」の一本、「金魚探亂」の眞佐子、「落城後の女」のおあん、「生々流轉」の蝶子、「河明り」の娘などが、それである。短篇では、「渾沌未分」の小初、「娘」の室子、「快走」の道子、「小町の芍薬」の采女子などである。

これらの美女達については、いづれ後の章で、岡本さんの生命の哲學や美學をさぐる折に、面影を語るつもりだが、ここですぐ氣のつく一つを言ふと、「渾沌未分」の小初は水泳の教師であり、「娘」の室子はスカルの選手であり、「快走」の道子はランニングをする。岡本さんはスポオツを歌にも詠み、また作品のなかに度々、いかにも肉體的に描いてゐる。

老妓の眼はぎろりと光つたが、すぐ微笑して、

「あたしかい、さあ、もうだいふ年越の豆も殖えたから、前のやうには行くまいが、まあ試しに。」といつて、老妓は左の腕の袖口を捲つて柚木の前に突き出した。

「あんたがね、ここの腕の皮を親指と人差指で力一ばい抓つて壓へてご覽。」

柚木はいふ通りにしてみた。柚木にさうさせて置いてから、老妓はその反對の腕の皮膚を自分の右の二本の指で抓つて引くと、柚木の指に挟まつてゐた皮膚はじいわり滑り抜けて、もとの腕の形に納まるのである。もう一度柚木は力を籠めて試してみたが、老妓にひかれると滑り去つて抓り止めてゐられなかつた。鰻の腹のやうに靱い滑かさ羊皮紙のやうな神祕な白い色とが、柚木の感覺にいつまでも残つた。

「氣持ちの悪い……だが、驚いたなあ。」

老妓は胸に指痕の血の氣がさしたのを、縮緬の襦袢の袖で擦り散らしてから、腕を納めていつた。

「小さい時から、打つたり叩かれたりして踊りで鍛へられとお蔭だよ。」

といふやうな、「老妓抄」の一節なども、その岡本さんのスポオツ風な肉體愛の一つの現れである。また例へば、「健康三題」といふ面白い小品がある。三つとも日蔭の花じみた、か弱い少女に、「私」（作者）の健かに強いいのち

の力を吹き込んでやるのが、主題である。

その一の「はつ湯」は——「両親が年老いてから生れた一人娘なので大事にし過ぎるせゐもあり大柄の割合ひに生氣が無く、夢見るやうな大きな瞳に濃い睫毛が重さうにかぶさつてゐる、」少女と、温泉宿に泊り合せる。少女は「私」に親してみたい素振りを見せる。そして、元朝の初湯のなかのことである。「五六人の人影の後からその娘の瞳がこつちを見詰めてゐる。今はよしと私は微笑んでやる。するとその娘はなよなよと湯を掻き分けて來て、惡びれもせず言ふ。

『お姉さま、お無心よ。』

『なあに。』

『お姉さまの、お胸の肉附のいいところを、あたしに平手でべちやべちやと叩かして下さらない？　どんなにいい氣持でせう。』

私はこれを奇矯な所望とも突然とも思はなかつた。消えさうな少女は私の旺盛な生命の氣に觸れたがつてゐるのだ。私は憐み深く胸を出してやる。」

その二の「春の濱別荘」は——やはり、温泉場に滞在の中に馴染みになつた中年の夫婦から、「もしここを引揚げるやうだつたら、五日でも十日でも自分のところの別荘へ寄つてそこにゐる娘と一緒に暮して呉れまいかと、たつての頼みを私は受けた。……『あなたのやうな氣性を是非娘に

寫して置きたいから』といふのである。」それで濱の別荘へ行つてみると「娘といふのは數へ年は十六ださうだが、見たところやつと十二か十三で、脾弱な胸に結んだ帯がともすればずり落ちるほど腰の肉などなかつた。……ただ瞳だけが吸ひつくやうに何物かを喘ぎ求めてゐた。さうかといつて病氣もなかつた。」その娘と一緒に食事をしたり、散歩したりする約束だつた。けれども「私は仕事に熱中し出して娘を顧る餘裕を失つたが、娘は起きるから寝るまで私の部屋に來て、黙つて、くの字に坐つたなり、私の姿をまじまじ見てゐるのだつた。」

「私はその頃、ダルクローズの舞踊體操に凝つてゐた。で、仕事に疲れて來ると忽ち室内着を脱ぎ捨てスポーツシヤツ一枚の姿で縁側でトレーニングをやつた。私の肉體は相當鍛へられてゐたから四肢の活躍につれ、私の股や腕にギリシヤ彫刻に見るやうな筋肉の房が現はれた。私自身自分の女の肉體に青年のやうな筋肉の隆起が現はれることに神祕的な興味を持つたのだが、氣がつくと、これに瞠つてゐる少女の瞳は燃ゆるやうだつた。彼女は見つめて三昧に入り、ぶるぶると身ぶるひさへすることがあつた。私はこれは思春期の變態の現れぢやないかと嫌な氣がしたが、さうではないらしかつた。健康なものを見て、眼から生氣を吸ひ込まうとする衰亡の人間の必死の本能だつた。私が運動を終ると、あえぐものが水を飲んだときのやうに彼女は咽喉を

一つ鳴らし、『もうもう本當にいい氣持でしたわ。』と襟元を叩いた。

それから三年ほど経つて、その娘は結婚した。今は憎くらしいほど丸々肥つて子供の二、三人も出來た。」

その三の「ゆき子」は——蜜月の旅に出た娘への手紙だが、「改めて言ふまでもなく、あなたが嘗て私の傍に、すこしの間置いといてやつたのは、あなたの親達から頼まれたからであるけれど、私があなたを一目見て、あんまりあなたが貧弱なのに義憤を感じたからさ。……私は齒痒くて堪らなくなつて私の健康を見せびらかし、私の強い、のちの力をいろいろの言葉にしてあなたの耳から吹き込んでやつた。そのせゐか、あなたはだんだん元氣になり、戀愛から結婚へ——とうとう一人前の女になつた。……

あなたは私が都に一人ぼっち残つてさぞ寂しからうと同情する。よしてお呉れ、私は人から同情を寄せられるのは嫌ひだ。寂しいことの好きなのは私の性分だ。けれど斷つて置きますが、私の好きなのは豪華な寂しさだ。

私は好んで私を愛する環境から離れてゐたがる。一人、私は自分の體を抱く、張り切る力で仕事のことを考へる。自分の價值につくづくうたれる。だがこれは病理學でいふ『自己陶醉症』などいふ病的なものではないよ。自分の生命力を現實的にはつきり意識しながら好んで自分を孤獨に置く——この孤獨は豪華なぜいたくなものだよ」

自己陶醉の、また自己崇拜のナルチスムスは、岡本さんのいちじるしい性向であつた。無論一方に、「良心的なるもの」のあまりに自虐に過ぎたる「性癖」もあつた。「かういう過剰の情欲を擔つた一方彼女の家の血統には嚴しい倫理癖があつて極端な自己批判や自己呵責の性分があつた。」と、岡本一平氏が言つてゐるし、自分ばかりが人並はずれて己を責めなくてもよさうなのにと苦しまぎれに、かの子さんも歌つてゐる。例へば「やがて五月に」の主人公泉宗輔などは、この自己崇拜と自虐とが、一つの魂に病的に巢食つた、悲劇的人物である。また、あらゆる藝術家の性情の両面である。しかし、なんとしても岡本さんの作品では、ナルチスムスの方が濃い色を盛つた。「母子敘情」、「雛妓」、「かの女の朝」などの、岡本さん自身の姿らしい女には、これの單純な現れを見せてゐる。更に岡本流の美女達にはこれが複雑な根を張つて、永遠の青春と美との祕藥となつてゐる。ナルチスムスを外にしては、岡本さんの美女達の謎は到底解けないのである。そして女性による女性崇拜の源の一つも、ここにある。

スポオツの動力的に躍動し緊張する一瞬の女體にも、ナルチスムスの恍惚と戰慄とを、岡本さんは感じたのである。その姿に美の一つの極限を見たのである。従つてそれは、靈界へ射し通る稻妻であり、悲劇的な放心に澄みわたる、大自然と肉體との融け合ひでもある。「丸の内草話」の一